

英和辞典の内側と外側ー『ウィズダム英和辞典』と『フェイバリット英和辞典』を中心にー

司会・提案者：山田 茂（早稲田大学）

提案者：井上 永幸（広島大学）

提案者：磐崎 弘貞（筑波大学）

概要

英和辞典は受信が主目的の二言語辞書である。160 年の間、時代の要請にこたえつつ、国内各社間の競争に加え、学習英英辞典との相互作用の中で発展してきた。1990 年代以降は、電子媒体が出版、使用に大きな影響を与えた。

『ウィズダム英和辞典』（第 1 版 2003、第 4 版 2019）は我国初のコーパスに準拠した辞書として、『フェイバリット英和辞典』（第 1 版 2001、第 4 版 2021）はわかりやすさ、使いやすさを追求した学習英和辞典として、英和辞典史上に確固たる地位を確立している。本シンポジウムでは、これら 2 つの英和辞典を中心に、編者の先生方にそれぞれの辞書の出版の背景、販売戦略、編集方針、前版との比較、特徴、使い方等に関して詳しく解説して頂く。また、それぞれの辞書を学習英和／英英辞典の発達史、日本の英語教育、学習指導要領、これらの辞書が対象とする日本人のニーズ、学習・検索環境の視点からとらえることにより、英和辞典の意義を考え、未来を展望する。

「英和辞典の流れと学習英英辞典」

山田 茂

『英和対訳袖珍辞典』（1862）に始まる英和辞典は 160 年の歴史を有する。その間、様々な変化に合わせ、日本人の英語受容、学習をサポートしてきた。数々のフィーチャーが導入され、受信型の二言語辞書としては世界有数のクオリティーを誇る。英和辞典の発達の過程は、内的な要因と外的な要因に目を向けることにより多くのことが見えてくる。

投野（2006：9-10）は、一連の英和辞典の編集の流れを「学習辞典の『詳しさ』と『易しさ』の流行の波が交互に来る現象の一例」だと見ている：詳しさ（『研究社英和中辞典』）→易しさ（『ライトハウス』）→詳しさ（『ジーニアス』）→易しさ（『フェイバリット』）。最初の「詳しさ」から「易しさ」への転換の一因に学習指導要領の改訂を挙げ、電子辞書の出現により『ジーニアス』一辺倒になったと指摘している。

1942 年には、世界初の本格的な学習英英辞典、Hornby 他による *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* が日本で開拓社により出版された。同時書は英和辞典にも影響を及ぼした。他方、英和辞典が打ち出したいくつかの新機軸も学習英英辞典に取り入れられた。両者は相互作用の中で発展してきたと言える。

参考文献

投野由紀夫. 2006. 「Learner's dictionary 概観」『日本語学』Vol. 25. 明治書院.

サヴァイヴァルのための英語学習を支援して —『ウィズダム英和辞典』を中心に—

井上 永幸

『ウィズダム英和辞典』（初版，三省堂）は，本格的にコーパスを活用した国内初の学習英和辞典として 2003 年に発刊された。2007 年には第 2 版を，2013 年には第 3 版を，2019 年には第 4 版を上梓することができた。紙媒体をはじめ，インターネット，モバイル端末，電子辞書等，様々なメディアのユーザーの方々から予想以上の反響をいただいたことは，望外の喜びである。本シンポジウムでは，最初に『ウィズダム英和辞典』の歩みを概観したあと，数ある英和辞典の中で『ウィズダム英和辞典』はどこが違うのかといった，初版以来の編集方針や第 4 版における改訂のポイントについて例を挙げながら詳しく述べ，時間の余裕があれば，編集中的エピソード，今後の展望などについてふれたい。

紙辞書は死んだのか？ —『フェイバリット英和辞典』編集から見る新学習指導要領と語彙ネットワークの構築—

磐崎 弘貞

新学習指導要領（2017, 2018）においては，4 技能 5 領域の統合や英語での指導に焦点が当てられがちであるが，しっかりと「辞書指導」もその指導ポイントの 1 つとなっている。実際，中学用英語新教科書にも辞書指導のページが掲載されていることが多い。高校に目を向けると，英語を先駆けとして 2024 年からデジタル教科書の本格導入が予定されており，それに合わせて英語辞書パッケージを導入する自治体も多い。しかしながら，高校生においては，さらには教師を目指す教職課程大学生においても，英単語の意味はいきなり Google 検索を利用するという学習者が多いのも実情である。

『フェイバリット英和辞典』（第 4 版）はこうした状況の打破のために，紙辞書の復権を目指すことを意図して編集が開始された。見出し語を限定し，文法用語を極力廃しながら紙面のカラー化／イラスト化やフォントの工夫で見やすさを求めるとともに，語義のつながりと用例／コロケーションを組み合わせ，それを眺めることで学習者が語義のネットワークを自然と構築できることを目指した。高頻度語義バイアスや高頻度単語バイアスにも留意しながら，紙ページをめくり，英語の骨子を学んでもらう仕組みについて触れていきたい。